

資料紹介

津久井さん作成の新聞切り抜きを見て思うこと

大里 浩秋（非文字資料研究センター 客員研究員）

はじめに

新島淳良さんが収集・保存していた中国の文化大革命（以下、文革）のポスターを里子夫人から寄贈していただいたのは6、7年前のことで、その後二百数十枚に及ぶポスターの修復を経て、2019年2月にその展示を行うとともに「中国 文化大革命を振り返る一日本人はどう受けとめたのか」と題するシンポジウムを開いた（シンポジウムの報告は『非文字資料研究センター News Letter』No. 42、2019年9月に掲載）。その時の展示は、ポスターの他に、『毛主席語録』や毛沢東バッジなど中国で発行されたものや、当時日本で文革を報じた新聞や雑誌類を並べたのだが、そのうちの新聞については、関連記事を切り抜いて時間順に整理したスクラップブックをお持ちの津久井弘光さんよりその数冊をお借りして飾った。

そして、このほど津久井さんをお願いして、文革開始の1966年から文革終了の翌年1977年までの記事を収録したスクラップブック計20冊を寄贈していただいたので、以下には、そのうちの開始年のごく一部の記事を取り出し、私とその頃感じて今も記憶に残っていることや今読んで新たに感じたことを交えていくつかのことを記して、いただいた切り抜きの紹介に代えたいと思う。津久井さんは長く中国の製糸業を中心にした研究をされており、戦前武漢に住む日本人（そのうちの漢口地区には日本の租界が置かれ多くの日本人が住んでいた）の各種の活動についても調べておられ、非文字資料研究叢書3『東アジアにおける租界研究—その成立と展開』2020年3月に「漢口の日本人居留民—概観と関連史料紹介」を執筆されているが、新聞切り抜きについては文革発生時から始めて文革終了後も続けておられるとのことである。なお、切り抜きは『朝日新聞』が主で、以下の引用についてはすべて同紙の記事によった。

文革開始年の記事

1966年は私が大学に入学して3年目で現代中国への関心を増しつつあったので、連日のごとくに載る文革関連の記事を読んでいたが、今でも記憶に残っているビッグニュースと言えば、「私の著作は焼き捨てよ。郭沫若氏、劇的な自己批判」（4月30日）だった。郭は1910年代に日本に留学した時から文学作品を書き始め、帰国後には中国共産党（以下、党）の抗日運動に参加、中華人民共和国建国後は学術界の要職について活躍した



『朝日新聞』1966年4月30日

ので、一体中国で何が起きているのかびつくりさせられる情報となり、その後自らの発言は誤解されて伝わったとし、「文化大革命は重大なことだから、進んで自分も協力し努力するために自分の考えを述べた」（「誤解された自己批判」、5月17日）といまいちわかりにくい弁明をしたこともあって、日本の文化界の反響は大きかった。毛沢東への批判が込められているとして複数の文化人の著作がやり玉に挙がっているとは前年末に報じられ、1942年からしばしば起きている知識人の発言や著作を毛沢東思想に合わないとして袋叩きにする「整風運動」の再来ととらえてコメントされ、「関心呼ぶ中国整風運動」（6月2日）などの記事が次々に書かれている。そして、郭の唐突な自己批判あたりからは「文化大革命」あるいは「プロレタリア文化大革命」の呼称も並行して使われ出し、やがて文革に一本化して中国の動きを報じることになっていった。そうすることで毛沢東のやり方を陰に問題視してきた人へのより強い批判・打倒へと向かう流れになったことを伝えようとしていると、今回記事をながめて遅ればせながら感じた。



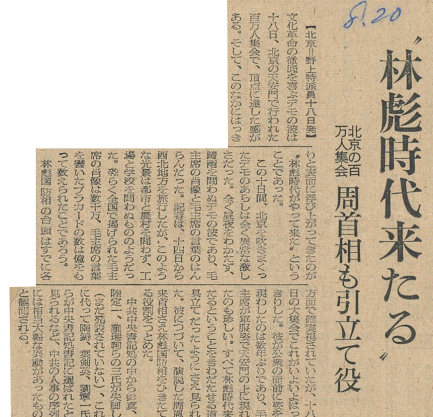


ところで、郭の自己批判を含む文革関連の記事が載る前後に、「核戦争に備えよ、全軍工作会議が指示」（1月20日）、ベトナム戦争が北方へ拡大したら中国は直ちに派兵すると、陳外相語る（3月26日）、中国機、雷州半島に侵入した米機を撃墜（4月14日）と続き、さらには中国初の水爆実験成功のニュースを大々的に報じ、それによってソ連との対立がますます複雑になったと解説している（5月11日）。それらの記事を今回読んで、アメリカやソ連との対立の最中にあり、現在北朝鮮が水爆開発に執心しているのと同様の事情に当時の中国が置かれていたことの記憶が文革に関する記憶に比べて薄くなっていることに気づかされた。そうした対外事情が文革を起こす際の毛沢東らにどんな影響を与えていたかを考えようとする問題意識が、当時の私に欠けていた証拠であろう。

6月に入ると彭真党北京市委員会第一書記が解任され、党中央機関紙『人民日報』の社説に毛思想への反対者は地位を問わず排除とあるのを紹介している（6月5日）が、そのあたりからは各界の大物指導者の失脚が次々にニュースとなり、建国以来最大の政治運動、果ては党内部で権力闘争が起こりつつあるかもしれないとの予想が載ることになる。そして、こうした状況を朝日新聞の特集記事「中国の『文化大革命』とは何か」（6月29日）では、現地記者の報告として次のように書く。「文芸批判から毛沢東思想を尺度とする七億人民の『魂』の総点検へと発展した今度の文化革命の経過を現地でみて強く感じるのは中共当局の巧みな“大衆操作”である」。確



注目をおびる二人 18日、北京で開かれた文化大革命 百万人集会で天安門横上に肩をならべて立った毛主席（左）と林彪国防相（右）



『朝日新聞』1966年8月20日

かに記者が指摘することく、文革は当局の大衆操作があつて毛思想を尺度にする「人民の魂の総点検」の様相を呈するようになっていくが、8月8日に党中央の名で発表された「プロレタリア文化大革命に関する決定」によると、文革は「わが党の指導のもとに十分に大衆を動員し、毛主席が提出した“イデオロギーの面でだれがだれに勝つか”という問題を解決することである。文化大革命はプロレタリア世界観とブルジョア世界観の闘争である」と述べる（8月12日）。毛思想こそが正義の指針というわけである。そして、数か月来の大衆運動の経験を総括して作成したこの決定に基づき、より具体的に大衆動員をかけていくのである。

8月に開いた党中央委員会全体会議で、林彪国防相が人民解放軍に軍を挙げて毛沢東の著作を学習する大衆運動を展開するよう呼びかけて全党・全国の輝かしい手本になったと評価したことで、毛の後継者として「林彪氏に確定か」の記事が書かれた（8月15日）。以後毛と林彪が並ぶ写真や林彪の発言が取り上げられることが多くなり、8月18日に天安門広場で開かれた百万人を集めた集会が林彪のお披露目の役割を果たし、他方批判は免れないと予想されて去就が注目されていた



『朝日新聞』1966年8月15日





『朝日新聞』1966年8月30日

劉少奇国家主席や鄧小平党総書記は集会への出席が確認されて、彼らへの具体的な処分は次年度に持ち越された形になった。

8月18日の大集会はまた紅衛兵のお披露目にもなり、以後日本の新聞は彼ら若者の遠慮のないふるまいぶりを伝えるのに紙面を費やすことになり、「北京街頭に文化革命のアラン。町名一夜で塗替え、少年紅衛兵が“実力行使”」（8月23日）、「紅衛兵、教会を永遠に接収」（8月25日）などの記事が載る一方で、「“生活革命” 迫る紅衛兵」のタイトルで「紅衛兵の少年少女が街に繰出して開始した古い風俗習慣思想をたたきこわし、新しい風俗習慣思想を作り出そうという革命運動は、次第に各単位、各組織のおとなたちの間に波及しはじめ」、紅衛兵に押しかけられた企業や組織では、「今や従来の間違ったやり方を自己批判し新しいやり方を討論している」と紹介しており（8月25日）、他にも、行き過ぎた面はあるけれども効果をもたらしている面もあるのではないかと書いている記事もある。当時私は、評論家大宅壮一ら7名が同時期訪中して、紅衛兵との歯に衣を着せない討論記録を含む大宅考察組中国見聞記と題してまとめた記録を複数の週刊誌で読んで面白かったけれども、紅衛兵の発揮した役割もあったことを紹介した上記朝日新聞の記事も興味深く読んだ記憶がある。しかし時間が経

って紅衛兵の運動が大規模化されるにつれて、北京の紅衛兵が地方に出かけた際の地方の党組織責任者に対する批判・攻撃が激化し、また運動内部の対立や労働者との対立も増えてきて收拾が容易ではなくなり、地方から北京に来る紅衛兵が増え続けているのに待ったをかけざるを得ない状況になったという記事が書かれた（10月25日）。毛沢東の権威を頼りに始まった大衆運動の暴走が短時間のうちに露呈してきたと言ふべきか。

開始時の文革については、『人民日報』、国営通信新華社電、北京放送、党中央理論機関誌『紅旗』などを主な情報源として記事を書いているが、秋ごろからは壁新聞（中国では「大字報」）から情報を得て書く記事が多くなったようである。なぜか、おそらく中国の公の情報だけでは文革の実情がよくは理解できないという経験が積み重なり、中国での意見表明の手段として壁新聞を人の目につく場所に張り出す習慣があつて、文革の時にもいつのころからか盛んに張り出されたことから壁新聞で情報を得ることを記者たちは思いついたのであろう。「羅瑞卿前解放軍総参謀長を“逮捕”、紅衛兵の壁新聞が報道」（12月25日）、「劉少奇中国国家主席が自己批判、党中央工作者会議で。壁新聞が報道」（12月27日）、「彭〔徳懷〕前中国国防相“逮捕”さる。壁新聞」（12月30日）などの記事が書かれ、とくに去就が注目される劉少奇については、前記の記事に続けて壁新聞に「劉主席の自己批判内容」を載せているのである。どこまでが正確な情報かを確かめることができないままに、朝日新聞を含む北京駐在の日本の記者たちは各所に張られた壁新聞を見て回って、それを記事にしていくのは翌年に続くのである。

## まとめに代えて

津久井さんが切り抜いたうちの文革開始年の記事を読んで、かつて感じたことを思い出すとともに新たに感じたこともあつて、事実の確認に加えていくつかのことを書きつらねた。不十分で手前勝手な内容になっていないか恐れつつ、以上をもって津久井さんの労作の紹介に代える。67年以降の文革に関する新聞記事については、近くまとめる予定の文革のポスターに関する考察を主とする一冊の中でも触れたいと考えている。

文革当初の1年のうちには、毛沢東思想を尺度にして七億人民の「魂」の総決算をすとか、集会で林彪がプロレタリア独裁下で「大民主主義」を推進すると演説したとか伝える（11月5日）が、その後「十年の内乱」と否定的に語られることになる文革について、その展開に当初から注目していた者としては、その結末を中国がどう総括し克服してきたかは、自国のことではないけれどもまことに気になることである。日本の近代、日中戦争、「大東亜戦争」、そして敗戦に至る経過を日本がどう総括し教訓化してきたかと同様の重みを持つ課題ではないだろうか。